弘前大学教育学部紀要　第93号：1～6（2005年3月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 93：1～6（Mar. 2005）

語彙史研究を利用した古文教育
－『伊勢物語』初段「なまめいた女」考－

Effectiveness of Lexcology on Classical Education

郡　　千寿子*
Chizuko　KOHRI*

【論文要旨】

語彙史研究という専門の研究成果を教育現場に還元し、魅力ある古文教育についての考察検討を試みたものである。一般的には、現代社会を生きる上で、古文の素養や知識、あるいは古典文法や古語の意味などは不必要である、と誤解されがちである。しかし、古典を学ぶ意義は、単に教養的に過去の文化遺産として学習することだけではない。現代の文化や社会について考えることにつながっているものであり、日本文化について再考し、日本語の成り立ちについて考えることにもつながっているのである。

本稿では、『伊勢物語』初段を教材として取り上げ、主人公の男性が心惹かれた「なまめいた女」の具体的な魅力について解説し、古語と現代語の相違性を明らかにした。「今」に影響を及ぼしている存在として、古文を理解するための教育方法の一例として、ことばの歴史的変遷に着目した、古文学習を提案するものである。

【キーワード】　語彙史研究　古文教育　現代語と古語

はじめに

高校古典教科書に掲載されている古文は多岐にわたるが、『伊勢物語』は比較的取り上げられることの多い教材である。なかでも、初段の「初冠（うひかうぶり）」はよく知られたもののひとつであり、たとえば、大修館書店の『高等学校古典Ⅰ』、教育出版の『古典Ⅰ』で採用されている入門期的な古典教材である。

古典嫌いの学生が年々増加している現状のなかで、魅力ある古文教育について考えることは、高校の教科教育の範囲にとどまらず、教育者養成期間である本学教育学部においても重要な課題のひとつであると思われる。本稿は、日本語学の立場から、語彙史の研究成果をどのように教科としての国語科教育に生かすことができるかについての試論である。

文学史上における『伊勢物語』の意義や、登場人物（主人公）の気持ちの理解、あるいは文法事項の説明、といった従来の古文学習とは違った視点からの、語彙史研究を利用した古文教育の可能性について提案してみたいと思う。ことばの歴史的変遷をふまえた言語文化研究を通して、古文と現在がつながっていることを実感させる授業実践例を提示し、また『伊勢物語』を教材としながら、必要に応じて、『伊勢物語』から離れて考えてみる、という教育方法の有用性についても言及してみたい。

古文という存在を、決して過去の遺産としてではなく、現在とどのように関連しているのか、現代社会とどう関係しているのか、そうした現代に生きる学習者の視点から古文をとらえてみることによって、学習者に身近な存在として位置づけをはかりたい。そうしたことが学習意欲にもつながり、理解の深化をうながすことになるのではないかと考えている。

1．教科書掲載の『伊勢物語』初段

大修館書店の教科書『高等学校古典Ⅰ』を一例に考えていくことにしたい。教科書本文には脚注として古文読解に必要な重要語句の説明が付されており、それも参考までに引用しておく。

* 弘前大学教育学部国語国文学科教室
Hirosaki University, Faculty of Education, Japanese Language and Literature Department

初　冠

昔、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩りに往にけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。

この男、かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいとはしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の、着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、信夫摺の狩衣をなむ着たりける。

春日野の若紫のすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず

となむ追ひつきて言ひやりける。ついでおもしろきこととともや思ひけむ。

みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに乱れそめにしわれならなくに

といふ歌の心ばへなり。

昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

① 初冠＝男子が成人して初めて冠をつける儀式。元服。
② 春日＝奈良市春日野のあたり。
③ しるよしして＝その土地を領有している縁で。
④ かいまみてけり＝物のすき間からのぞき見したのであった。
⑤ ふる里＝さびれてしまった昔の都。
⑥ はしたなくて＝不似合いなほどに美しくて。
⑦ 狩衣＝公家の男子の平服。狩りに出る時や日常の生活で着用した。
⑧ 信夫摺＝布地の染色のしかた。「しのぶぐさ」の茎や葉を摺りつけて、模様を染め出したもの。陸奥の国信夫郡（今の福島県福島市一帯）の特産。
⑨ しのぶの乱れ＝「姉妹を偲ぶ心の乱れ」との掛詞。
⑩ 追ひつきて＝すぐさま。
⑪ ついで＝事のなりゆき。ここでは、このような折をたらえてすぐに歌を詠んで贈ること。
⑫ みちのくの…＝「古今集」恋四に、河原左大臣（源融）の作として収められている。「しのぶもぢずり」までが「乱れ」を導く序詞。
⑬ いちはやき＝はげしい。情熱的な。

本稿では、次章以降において「なまめいた女」をキーワードとして、『伊勢物語』の主人公、在原業平が心惹かれた女性像について解明することに焦点を絞って考えていきたい。しかし、教科書下段には、重要古語と思われる、本稿で考察語として取り上げる「なまめいた」という語には注釈がない。どの語に注釈を施すかという問題は、この教科書教材を使って、何をどう教えるかという目的にも関係しており、教科書作成者の判断基準のひとつを見ることにもなりうることを指摘しておきたい。

おそらく「なまめいた」は、単純に「優美な」と解説されるもので、注意を要しない存在と考えられていたと予想されるのである。

2．物語の展開

『伊勢物語』初段の物語展開について、簡単に要約すると次のようになるであろう。説明解説のために便宜上、古語の「なまめいた」「はしたない」を残したままでストーリーをまとめておく。

① ある男（＝在原業平）が奈良の春日の里へタカ狩りに行った。
② その里になまめいた女姉妹が住んでいた。
③ 思いがけず、田舎にはしたない様子でいたので、心が動揺してしまった。
④ 男は、すぐに狩衣の裾に歌を書いて恋する気持ちを伝えた。
⑤ 男の情熱的な振る舞いを雅（みやび）と賛美する。

特にここでは古語の「なまめいた」「はしたない」の解説が必要になると思われる。古文読解の際、気をつけなくてはならないのは「現在も使用していることば」である。

②の「なまめいた女」については先に指摘したように教科書に注釈がない。一般的には「優美な」[2]と解説されるようである。③の「はしたない」は、現代語との関連から誤解されやすいため、学習者が理解しやすいように教科書に注釈として「不似合いなほど美しくて」と解説されていた。しかし、古語と現代語との意味の相違を示し、現代語で理解できればよいというわけではないであろう。

なまめいた女＝優美な女

はしたなくて＝不似合いなほどに美しくて

と結論だけを示すと、現代語と古語の意味を対応させて、受験単語のように覚えなくてはならないもの、と理解されてしまう。ことばに興味を持たせるためには、結論だけを示すのではなく、その過程にまで言及し、「ことばの背景」について納得させる必要があるのではないだろうか。

「はしたない」と現在では「下品だ」と解されることばが、なぜここでは「美しい」という、ある意味で褒めことばになっているのか。不思議に感じてほしい箇所なのであるが、授業では、結論を提示するだけになりがちである。

言語の意味変化は決して突然変異ではなく、変化の背景には論理的に説明できる理由が存在するのである。

「はしたない」についての考察は次回にゆずることにし、本稿ではまず、教科書での注釈のない語「なまめいた」について検討しておきたい。ことばの背景について興味を持たせることによって、古文学習への意欲向上にも効果を期待したいと思うのである。

3.「なまめいた女」の具体像

手近な角川文庫『伊勢物語』[2]（石田穣二訳注）にもこの箇所は、「たおやかな女の美しさが本来の用法であろう」と補注されている。高校の古典の授業においては、「優美な女」つまり「美しい女」と理解させることで十分なのかもしれない。

しかし、彼らに実感を伴った古文として理解させようという工夫をするならば、「かいま見た男の心を瞬時にとりこにした魅惑的な女性」について、もう少し深く考えさせてみることは、有益な興味の持たせ方であると考えている。男が一目ぼれするほどであるから、きっと素晴らしい女性だったに違いない。一体どんな美しさをもった女性だったのだろうか。その「美しさ」の真相について追求させてみたいのである。

「まなめいた」ということばから現代の人々が想像するのは「艶めいた」ということばであろう。「艶」は「色っぽい」を連想させ、何となく男と女のにおい、セクシャルで官能的なイメージである。例えば現代の国語辞書『新明解国語辞典（第五版）』[3]の解説によれば、「なまめかしい－女の人の上品な美しさの中に性的魅力が感じられる様子だ」とある。

教科書の注釈にも解説されていないこの「なまめいた女」について、現代語に引きずられることを予想したうえで、学生達にこの女性像について質問してみた。かいま見た男を一瞬で虜にした素敵な女性なのであるが、一体どんな女性だったのだろう。具体的には、どういうタイプの女性を想像し、たとえば女優でいえば誰なのか。

「なまめいた女」を具体的に想像させてみると、学生達が返答してきた女性像は「川島なお美・藤原紀香・叶姉妹・黒木瞳」といった女優陣の名前であった。つまり彼らは「年上の魅力的な女性」を想像したことになる。

自分たちが魅力的だと思った女性、一目惚れするような状況設定を身近な問題として彼らに想像させ、考えさせてみることによって、『伊勢物語』の世界と自分たちの世界との共通点を見出させる。主人公の元服したばかりの業平は、授業を受ける学生達と同じ年頃である。若者の「恋する気持ち」を考えることを通して、遠い存在の古文が、自分たちと共通領域をもつ存在であることを実感させたいのである。

現代においてはまさしく彼らの想像通り、「魅惑的な大人の女性」であるはずなのだが、古語の「なまめいた」の真相は彼らの予想通りではない。実は「なまめいた女」とは、「艶めいた」ではなく「生めいた」女のことなのである。

4．古語「なまめく」の用例

比較的古い写本が残存している『今昔物語集』[4]では、まさしく「生メク」という漢字表記が次に引用するように使用されている。

賀茂ノ祭ノ物見車、返サノ紫野ノ生メカシク、神舘ニ郭公（ホトトギス）ノ眠タ気ニ鳴キ、花橘ニ付ル心バヘナドモ有メリ。

（『今昔物語』巻第十九　第三三）

艶（エモイハ）ズ装ゾキタル女会タリ。濃キ打タル上着ニ、紅梅・萌黄ナド重ネ着テ、生メカシク歩ビタリ。　（『今昔物語』巻第二八　第一）

「なまめいた」の「なま」は「生卵」の「生」と基本的には通じているものである。「生卵」は加熱調理していない卵のこと。「生」は本来の自然そのままの姿、未熟や不十分という意味である。「生卵」が「熟していない卵」であるように「なまめいた女」も「熟していない女」を指すのであり、年齢を重ねた女性は、条件に反するのである。未熟で自然そのままが美しい、生娘でなければならない。「若さの中のみずみずしい美しさをもつ清純な少女」が「なまめいた女」なのであって、色っぽさや成熟ということばの雰囲気とは、実は対極に位置する美しさの表現なのである。

とするならば、学生達が想像した女優陣「魅惑的な年上女性」は当てはまらないことになることがわかるであろう。「なまめく美しさ」は、本来の「自然で清純な美しさ」から、「艶」という漢字表記の作用によって、女性のたおやかな色っぽさ、媚びをふりまく方向へと意味変化していったことばだったのだ。

もともとは品のある美しさを表現したものであり、女性特有の美しさを指すものではなく、男性に対しても使用例が多い。たとえば、『源氏物語』[5]の光源氏や薫中将といった男性の、派手に飾らない自然な気品ある容姿を賛美して使われてもいる。

いと若く、清らにて、かく御賀などいふことは、ひが数へにやとおぼゆるさま、なまめかしく、人の親しげなくおはしますを…。

『源氏物語　若菜上』

ここでは「若く」「清らかな」様子が「なまめかしく」と表現されている。また、次のような場面でも使われている。

大君「いみじうもあるべきわざかな」とて、うしろめたげにゐざり入りたまふほどに、気高う心にくきけはひそひて見ゆ。黒き袷一襲、同じやうなる色あひを着たまへれど、これはなつかしうなまめきて、あはれげに心苦しうおぼゆ。　『源氏物語　椎本』

大君の喪服姿を描く一節であるが、気高く、奥ゆかしく、しみじみとした感じで、しかもいたわしいほどに優美な美しさを表現した箇所である。外見的な美しさではなく、内面的な気品ある容姿を賛美していることが知られる用例である。

また、高校の教科書教材として必ず採り上げられている『枕草子』[6]には、まさしく「なまめかしきもの」（第八十五段）を列挙した章段が存在する。

なまめかしきもの

ほそやかにきよげなる君たちの直衣姿。をかしげなる童女の、表の袴などわざとはあらで、ほころびがちなる汗衫（かざみ）ばかり着て、卯槌、薬玉など長くつけて、高欄のもとなどに、扇さし隠して居たる。

薄様の草子。柳の萌えいでたるに、青き薄様に書きたる文付けたる。三重がさねの扇。五重はあまり厚くなりて、もとなどにくげなり。（中略）

白き組の細き。帽額のあざやかなる。簾の外、高欄に、いとをかしげなる猫の、赤き頸綱に白き札つきて、いかりの緒、組の長きなどつけて引きありくも、をかしうなまめきたり。

五月の節の菖蒲の蔵人。菖蒲のかづら、赤紐の色にはあらぬを、領布（ひれ）、裙帯（くたい）などして、薬玉、親王、上達部の立ち並みたまへるにたてまるれる、いみじうなまめかし。取りて、腰にひきつけつつ、舞踏し、拝したまふも、いとめでたし。

紫の紙を包み文にて、房長き藤に付けたる。小忌（おみ）の君たちも、いとなまめかし。

『枕草子　八十五段』

「なまめかしきもの」と最初に挙げられている、君たちの直衣姿は、「ほそやかに」「清げなる」様子で、その美しさを「なまめかし」と表現している。また、「童女」のかわいらしい姿を評しているところからも、決して「成熟した美しさ」ではなく、「若々しい初々しい美しさ」が「なまめかしい」の本質であったことが理解できるであろう。

このほか、『枕草子』では、引用本文にみられる

ように季節や自然のなかに「なまめかし」い美を見い出しているのである。新芽の萌えいずる様子を上げているところからも、当時の「なまめかしさ」は、初々しい新芽や清らかでさわやかな若葉に感じられるような美意識であったことが、うかがい知ることができる。

1603年に成立した、日本語をポルトガル語で説明した『日葡辞書』では、「ナマメカシイ」が古語を示す剣印を付した語形で掲載されている。『邦訳日葡辞書』[7]では、「Namamecaxij.ナマメカシイ（なまめかしい）愛嬌があって美しいこと」「Namameqi,u,eita ナマメキ、ク、イタ（なまめき、く、いた）容貌や身のこなしが優美で見事である。一般に婦人について言う」と解説があり、中世期には女性特有の美を指すことばとして使用されていたらしいことがうかがえる。しかし、少なくとも、まだ「色っぽい、妖艶な」という現代に通じる美意識には限定されていなかったのである。

5．言語研究の縦軸と横軸

「なまめいた女」について、現代の私達が想像する女性像ーたとえば川島なお美や黒木瞳らーは、あくまで現代語を基礎とした考え方である。業平が恋した「なまめいた女」は、現代語訳では「優美な」魅力をもった女性には違いないが、その美しさの資質は、学生達の予想とは全く正反対だったのである。「成熟した女性」でなく、「若々しく初々しい女性」を想像する必要があったのだ。

学生達は自分たちの予想が裏切られたことに衝撃を受ける。しかしこれはマイナスの衝撃ではなく、ことばの背景についての実感を伴った理解へとつながるであろう。ことばの変遷の真相を知った彼らが今一度『伊勢物語』の世界に戻った時、冷めた眼で眺めていたはずの古文の世界が、自分達とつながった身近な存在として映るはずである。

「生めいた」が「艶めいた」に移行するのはことばが生きているからであり、言語使用者である私たちが生活しているのと同じように、ことばがそれぞれの時代と社会の中で息づきながら存在しているからだ。

今と昔のことばの意味の相違、イメージの違いを知ることは、それぞれの時代と社会の相違を考えることにつながっている。過去から今へと続くことばの歴史的考察は、縦軸によって言語観察する方法である。過去の言語との関わりを考えることは、言語を通時的にとらえてみることである。

そして他方、『伊勢物語』以外の古典作品の使用例を検討することから、古典の世界における横のつながり、ある時代における言語の静止的な状態を知ることができる。共時的なことばの在り方をとらえる方法である。

『枕草子』では、「季節や自然になまめいた美」を見出していた。『源氏物語』では、女性美に限らない男性への用法があった。そうした『伊勢物語』以外の作品から、「なまめく」ということばの表現された具体例を知り、現代と古典の世界における言語イメージの対比をより実体化して理解することができると思われる。

『伊勢物語』の文学作品としての学習からは少し離れるが、こうした言語研究手法を通して、社会と文化の多様性を知ることにもなるであろう。日本語の変遷を考える、言語の背景を知る、という視点からの授業実践を通して、古典という教科そのものへの興味を喚起させることができないかと考えている。

おわりに

『伊勢物語』は古典における当時のベストセラー作品であり、後の日本文学に与えた影響も大きかった。『伊勢物語』は、今でいう、吉本ばななや村上春樹の作品のように多くの読者を魅了したのである。自分が好きか嫌いかは別として、多くの読者に支持された作品ということで、価値をもつものであり、知っておくべき古典文学作品のひとつであることを伝えたいと思う。

『伊勢物語』は在原業平と目される「男」が、行く先々で恋をする物語である。一二五段あり、彼の一生涯にわたる恋愛遍歴のおはなしである。羨ましいと思うか、軽薄な男だ、と軽蔑するか。自分なら彼のことをどう感じるだろう。

当時の人々の憧れの対象であった業平像を想像しながら、また、彼が恋した女性像に思いを馳せながら『伊勢物語』を読んでみると、遠い存在だった古文の世界が、恋物語という自分にも予想可能な身近な存在として興味深く感じられるものとなるのではないだろうか。

単純に考えれば、本稿で取り上げた初段の物語の「出逢ってすぐに一目惚れしたと熱烈なラブレターを送りつけてくる男性の言動」に現代女性は、

感激することなどあり得ないであろう。現在なら、ストーカーまがいのこの言動が、なぜ『伊勢物語』では「雅（みやび）」[8]としてプラス評価されているのであろうか。個人によって好みがあるように、時代や社会による判断基準が違うことを理解する必要もある。当時の文化思想の真の理解なしには、この初段の面白みは共感できないであろう。

古（いにしえ）の世界に現代の学生を誘うのには、それなりの仕掛けと工夫が必要である。過去は現在につながっている。昔を知り、それと比較することにおいて「今」がより鮮明となり、古文学習は広く現代社会や現代語を考える資料とも成りうるのである。過去と現在において何が普遍で何が相違しているか。学生自らに思考させながら、言語変化に焦点を絞った古文教育の一例について『伊勢物語』初段を題材に考えてみた。

近年、学習指導要領が改訂され、国語の教科としての目標が、文学傾倒を見直し、言語事項や言語文化といった領域を重視する傾向になっている。そうした現状を背景に、日本語学の視点からの教科教育について、今後も考察検討を重ね、提案していきたいと思っている。

注

1）日本語学の語彙論としての研究論文は多数発表されている。北山渓太「「なまめかし」「艶」考」『国語と国文学』31巻12号、1954年12月、前田惟義「「なまめかし」論」『国語と国文学』34巻１号、1957年１月、小島俊夫「「なまめく・なまめかし」の意味」『日本語と日本文学』３号、2000年８月等参照。

2）角川文庫『伊勢物語』（石田穣二訳注）角川書店、p15参照。現代語訳は「とても美しい」となされている。日本古典文学全集『伊勢物語』（福井貞助校注・訳）小学館、p133、「なまめくは、なよよかに優美である魅力のあるさまをいう。」と補注があり、現代語訳は「たいそう優美な」となされている。高校教科書の『古典Ⅰ』（教育出版）所収の『伊勢物語』、p20、本文の脚注には「なまめいたる＝若々しく美しい。「なまめきたる」のイ音便。」と解説が付されている。日本古典文学大系『伊勢物語』（大津有一、築島裕校注）岩波書店、p111、「若々しく美しい」と補注がある。

3）『新明解国語辞典（第五版）』三省堂、2000年、p1048参照。

4）日本古典文学大系『今昔物語集四』岩波書店、p128、『今昔物語集五』岩波書店、p52参照。

5）『源氏物語』の「なまめく」「なまめかし」を考察した研究論文、梅野きみ子「光源氏の「なまめく」「なまめかし」美―「きよら」美と対比的に―」『平安文学論集』1992年10月、梅野きみ子「光源氏から薫へ―その「なまめく」「なまめかし」美のを中心に―」『名古屋大学国語国文学』1986年12月、等参照。引用本文は、完訳日本の古典『源氏物語六』小学館、p43、『源氏物語八』小学館、p171参照。

6）角川文庫『枕草子上』角川書店、p117参照。石田穣二訳注の角川文庫本によれば、この八五段の「なまめかしきもの」は「優美なもの」と現代語訳されている。

7）土井忠夫・森田武・長南実　編訳『邦訳日葡辞書』岩波書店、p445参照。

8）『伊勢物語』の「雅」論は研究論文が多数ある。犬塚旦「みやび考」『王朝美的語詞の研究』笠間書院、1973年所収、秋山虔「伊勢物語『雅』の論」『國文学』24巻１号、1974年１月、鈴木日出男編、『別冊國文学No.34竹取物語伊勢物語必携』學燈社、1988年５月、『國文学・伊勢物語と業平の世界』24巻１号、1974年１月等参照。

(2005. 1. 11受理)